くは乃かゝす
全

寿松軒と号せらるハ紀の熊
野なる藤代の大神に仕へ仕まつる
神職にて南松と申ける大まし
ぞとういし侍りける非常此瀬ニ檀
林の風雅を好みて難波の西鶴翁を
師として自らに深く裁られける軒号
の一字も西鶴翁の寿松軒の一字なり
とて今も其家に去務の自檀ると

のゆかりをいくれと集めて古椎のすゑ
らとなんを忍ひてさらつゝてゝゐ
てく一巻となし玉ねこい檀林の画
のむらし思ひくさきあつれて白一る
をゆかるの絶るん／ゆりける

万延もとの年
ふ月のすゑ　稚山庵主

音羽川のほとりにしはしは
三のお山に真幽さき俳人
好人中に茂く林草庵
まうね好みて是良雲
にめつらし

中西鶴花さく白しぶに秋の空
鳥い皇ヲく　名に山比　月
弓あゝみ於酸醇まてそ

鶯は白きうちえんとす紅葉は
さく人は西くのうれしき
俳諧も是これ此ゆくを
まつ世古代の通うてゆ
近年梅まゐりつゝ句
の仕立あるわれて

難波俳林
二万翁

右眞蹟は中氏所藏

東順
　参詣行
本院に施すゝむや春の雨
ありや宿らぬ彩へ来てくはる　南水
南て人の縁を風の移さして　泉子
　ひとり男
辞世
語る身はちとまつなれ露の色　寿印彩　南水
各ちゝは今月今日秋の露

吉す川ゝなき芸能
及えにてありて俳諧に
心る人心ゝして家を
のこゝる其ゝ家と

紅塵や不二も見ちふゑの雲　玉置修理 安之

くまの鳥の路離て御宿から
ゑ川ふうつる七線や十四景
徳ゝくれ筆　親ふ　墨見られ
ゑをもちて一種ゝそして樂居ゟ

安之俳名詳ならず伝はつてる人は南泉
のみなり南水は安之の伝はへありける

歳旦

世済帯に春迎ふる今朝の心持
門松や作りて色香はあれ共
世話也世は何かまた々今朝の春
歌よみは昔とや殊ん桃の酒
探る手や蝶の形乃餅ヶ坊
三日也汐汲した所ゝ河の海
喜世を来二ま吉野の樽る

枝たをむ松え時雨の情かな

歳旦

押賣も人や憎からぬ花乃春
物書に趣やかゝる不二乃山
正覚や願主ハ誰しや孔し村時雨
若菜にハ吉野ふ春三月
宿此首尾何と名月十六夜
松竹よしや妹背の中垣
野路乃はしめや柳下小笠

歳旦

屠蘇酒やあまくハ又梅さくら
寳しや君母親ぞ見そめて
蹄桜や姑の称乃道禅師
那智山禅定の折から
伸らすむ再ふ孔せよ瀧かゝら
言葉の花よりして

花見て住まし小袖の情うる
今日はや婦さ住家桃の宿
御構もなくりうけるもから菜かな
見ておちて来たるすてたりふの月

歳旦

元旦へ本年の立文字今朝の春
色明るやうれて隣の年の子
雪花はちは高く国の詠うる
春の雨ふるゆえぬく朋着る

父なる追善

空やるの年の葬ふ血の合ル
花いるは咲かいもそれる身を好り
櫻林今すて思はし春とき子
松ちぎるて家追らへ世は他の香

歳旦

魚は木に餅乃花さく神の春

出る人ふ皆気をつけし廿年ら

三物

一すゝめや先初婚ありしく
しれやし男根達る風俗
杯離ず従ふ云奈をそへて

歳暮

一思案たる我の七十年の暮
ありあるに掃くる（本さし）煤の除下地
初咲の梅や伍つ乃礼匝
附る様ぬをりて 拝する

七夕

一直草性種さ天香の星乃中
名けるや消ゆ 中乃入亂毛
附るや全田の帯子鳴此尾
書み父を命親仁の盃談候
命言あまるら常ま子を弓すもの

筆捨に扇にある浦の秋

連中一巻満ス畢

歳旦

門に立松をみて知し年の色

世の氣色花に先立見えさる

墨子にほつりて梅こそ釼の枕

七日の遊ひ過て元三過ては

乾布にうるや〆　御代は恵ます

春めくや雪の柳のたへてゐる

元禄十二のとし辰の霜月旧友倒王
付けし茂の宅にて流日侍の打ふりタ
立春さそふふりけるに

南水

是の中比徳をそふる夕立に

鎧（ヨロヒ）ませつる百季のはつつさ

嘉水

歌仙一巻満ス

長病する禅は世由分の性空に

夕涼こりるや世ふうかれ　損

寄仙　独吟

九年の暑を禅れしくれ星
経ひ日を連て長ふ
弄人や釈まやりハ世俗もす
隠むくつ作ゐ細工人手行
三系ハ隠ム寄・寄る宛らく
たとへハ西仙なて喰て知れ
骨折てもま苦　作る人ころ
あてらひころ縁ハ江戸役
説進てあとの宿せ咄させて
物すくく　ゆハす折て文
まりね年よき色の河
読経のふ幽て永ねよする
奉の子ゑてあちつくり小高
絵まく訓ぬ羽織着て花
今ぬ花まつく　まふさわろ月

雑子の明言と称する大福
多きを破てむ春の伽羅く〱
今生涯をあまし馬て蹄
国使ば伏入ね津ゝ令下て
墨子うちかゝる人ハ突出や
名月ハ十日も六の字をるに
冬は辞乃食給の一脈
翁言ほお肩　去ほくしれ

茄子人諸乃其のいはぬと
是ツく国子一津所よう
ろそくこのくる祖母ちえは
なと某て就伏せらむ日和ら
小宮此神のおる在てなふ
曲る代の接地下此曲りうる
ば兮とも杉るちりけゑ
ゝ文て云ハ言経書とある

あそ頼む　妹々きか旅
青のゐに隣せれる□まさて
吹雪アアるの雪やこえく
立てらん若子雀の飛許
桃の花咲くの頃いそれよて

元禄十三年
辰杜澄本元不合あ
一巻二満吟ス

一哥仙　独吟

翁市ヨ嘗やタア此列とき
皆法庵の将也印乃花
さ天の互示くそ　縁何りて
入世人の状をまさて名落
世作いより七て夜りも借月
洞ヨ吞まて書白き　仮山
ウ
鳴麻を乳換ひてくる紀ゝ云

実楼の牡丹江戸へ宿源
出講子の門下此中の逢さへ紀
□病や伽羅のうつり香
起請文大事懐にて暖へし
尤其事ら　小西の居士
ゆる日此度も同の名残を惜とよ
読うけて書くその難題
逢心のつけを寄と吟ぐち
きらぬ都下にて此逢箇
色里の色名剤の花小袖
濃うらはしもすふ縁組
逃花を絶し後の乃春日空山
筆七ヤ三つ全みつるもの

元禄十三此辰　林鐘

一茶仙　雅吟

門に立松をみて知し年也道書
あちゐる春の人のこころさ
勝庭に鳴て鶯の人に
喜も月手はれ日記
行程は千里に寿帆を枝
沼を語し雪窓を花山
笹こ分ける来の徳

とんでみれば光の所は勝
西久やき作住るゝけふまで
我ある名月にあらで十六夜
翻て子稲田よりくる瓶の露
傾かくす　袖のしつ雨
名の立いとは吉原の二重弁
まことつきぬ色の人言
淋しとて芭蕉に座の主候

習ひ住するものハ語きま
雨の日や花を待つる紙に紀
蝶くるめれ寺の門竹杖
涯因子友華の庵移るゝ作髪し
久三郎人に残つゝ宿寄
起されて寄先の鳥塔や
揚揚の松陽のる池
何ちる蚕ハ涌と雲とる

月の移りうつれ己三年
年あしてもりや秋路へたる水
行孫つゝ其庵の近辺
手るくゆる世本さも鳴川手
色ハ人よ皇のみの一字紀
痛りハ何やら紙よて杜舟
踊き門此書の名作し
後老不審く千鳥の群すてて

忘るとて引や腰　忘
此菴記る主のひとあるくとも
結句近まそへらせられ
我等まて花不下戸といやさなき
雀も踊うたひすねて候

元禄壬申
仲秋名月
寿毛宴て実よろこふる秋踊
仲秋の頃湯の山へ妙人の会蒔ふ

名月に誰か淀屋て二世酔
揚山作耕市まて

秋雨や山のこずゑの俤の昭
新酒の酒ともさこみへてゆる舟
ふるまい
謂云

東国時大

新京は桜や素通して錦の香
聊雪や其窓の白霰小米二のさい

己
歳旦

四方拝して世の中を分る今

三物

三物や尾上座の七門の春
年徳棚に福寿草く先見
萬物の名所の拝乃討切して
備前三宗天神講釈より　菅公の
松は花梅はくれなゐる世は黄金
同く春みてうるまでの拝

詠めの桜あり

春まては会年も拝不の様々なる
此間留守をふてる行々寺
参の花や青るかぶ首のお宿へ
紙幟世々の門の罷言し
絵振や子供はみしまの筆物り
朝寐する人をそめるよ日雨
寄人や花の春丸て来るそく

汐干

うハ草履ニ足はまく汐干する
酒壽の残るも此朔月

歌仙　独吟

牡丹の花やちつて天地礼拜ス
え年酒ハ菖蒲此江水
今の世ハ葎俵一つ手田にて
寅子のなかハ踊る金借子ニ至
月の舟代長いり明るの森
三ヶ月ほまれ名不生香露
愚の雲五十百里と暮もみち
坊主後る左右のうにう
鉢形む田舎下りの勝気
涙の真竹やか伊勢の神徳
金鼠土用くふまどうして
餅換ようこ木まてつつ月

梶の葉をあしの一通り溢まで
目出度きを得たりし
浮き平小百生ていしをおひ
吾妻へ下る　元服とも
陣茶ともある男なる輩の学
振舞講を詠し　岩
詩
雪の図を長く呼る日を詠けん
明らかにこれをさ比の大家

年々歳十一を三らして
詠みしも翁の翁子
に作附きのなると叫る
名言あや蟻の月
団扇の書まして宮まに好
加減くの菜ぶ入る
寛政戸和の印記附して
浮れ阿蘭陀　菜せまる

為ほニ家の神ヲ仕へけて玉高
三ら讀ぬ詞をくり返し了み
燒掃て小荊拂ふて飾らて
是非一ッ儀ニ芽節の花
師の園ヲそてけるて涼しくる
水の薄ヤ宵と唐代る
大夜の入合くのし ゐて
照る日のか知る人もなき

宝永元
丑卯此夜月

○
寶永六丑の名月ニ流芒
録す

名月や男山ヨし神拝む　南水
芒ニそれの露の小ゝ波　幸
一町光本綾此雁の吹つけて　八雪
行人腰をかくる流して　ニ流

梅一木小鳥の山や雪の庵ま

浅草庵前の梅ニ元

足跡やさそひて庭も隅咲

毎年庭前梅の名残

百日の春の名残や花の雨

正徳三巳ノ年旦

元朝や隣之初笑

篤て巴石輝の年を迎

三おそ国年ふ

国民も山鳥の尾と春の日を

来る年も降る雨の年玉

なほ多ふとひと詠来ぬを誓て

年初候経ての一句

唐猫と連て胡蝶のさまよひ

杉井の蛙泊ゝる糸柳

菊苗や雨の晴間に仮市

蛙子の汐干流の若葉や浅の山

帰峯子へ申て

師の花やおのが桜とやーて見て

申前上　正徳云

初日影めぐみ重す花は小判形

筆売

若葉の桜や来るゝ家の売

宇佐錦りたまへれ翁の快遊此
誰の家まうさうり

宗因発句はの名木は
おもかげも尚あさうす　南水

梅が香に逢てやみても山鳥

南さまる鶯のなけるかな　久十

全

梅ちりて桜の来る迄
鶯は来ても思ふまで　南水

みよしのの桜を見さして枕

春の鶯をとふりしての呼　久十

新年や古筆ちらしの一ト巻ゝ
三ヶ月は萩や芒の懐子

乙未ノ冬のはしめて此ちらし絵て
さて題句を名付る中に此古の原
本の表紙うつしに出ゐたる表御
印の題句を写とおけ候 二王残
是迄かくらく名付し まゐ元